

# プロローグ

マイアミ空港を定時に飛びたった飛行機は、南西方向に真っ直ぐ進む。1時間ほどすると、キューバ上空との機内アナウンスがあった。キューバの上空は避けて飛ぶものと漠然と思っていたので、ちょっとびびりした。間もなく緑の陸地が見えてきた。鬱蒼とした熱帯雨林のなかを、大きな河が茶色の帯のようにうねうねと流れている。

資料によると、ニカラグアの東海岸側はまったく開発されていず、大きな街もないようだ。まさに緑の海のようなである。山岳地帯に入ると、ようすは一変する。山の上まで切り開かれ、よく耕作され、さっきのキューバの景色に似てパッチワーク状になっている。まるで、日本の豊かな農村景色のようだ。

高度を下げ山岳地帯を抜けると、すぐ眼下に大きな湖が見えてきた。美しいブルーの水を湛えたカルデラの湖は、

マナグア湖にちがいない。ほとりには、整然と区画された敷地に赤い屋根の建物が見え、飛行機が旋回しながら降りるにつれて、美しい赤い屋根は錆びたトタン屋根に変わっていった。

## ニカラグアの地勢

中米は、南北アメリカ大陸をつなぐ地溝帯の上にまたがっている。ニカラグアはその中米地溝帯の真ん中にある。そのため断層が国土を南北に横断している。この断層に沿って、火山がきれいにならんでいるのが地図の上からもよくわかる。

ニカラグアの面積は13万km<sup>2</sup>で、中米諸国中もっとも大きく、日本の九州と北海道を合わせた面積にほぼ等しい。全域にわたりジャングル性の原始林に覆われていて、ココ川、リオ・グランデ・デ・マタガルバ川など、水量の豊

マナグア湖。琵琶湖の1.5倍の面積をもつ美しい湖だが、汚染が進み、泳ぐことも魚を獲ることも禁じられている



富な大河川が大西洋に流れ込んでいる。太平洋岸にはマリヒオス山系が縦走り、中央の山地との間は肥沃な平原となっていて農業が発達し、人口の大半がここに集中している。この平原にはマナグア湖、ニカラグア湖がある。マナグア湖は1042km<sup>2</sup>、ニカラグア湖は8264km<sup>2</sup>（琵琶湖の約12倍）の大きさである。

東側のカリブ海岸地帯は高温多湿の熱帯性気候で、ほとんど1年中雨が降る。西側の太平洋岸も高温多湿だが、カリブ海側よりも乾燥している。中部高原地帯および山岳部は温暖で、雨量は東部より西部のほうが多い。山岳部および太平洋側では5月から10月が雨季、11月から4月までが乾期である。ニカラグア人は、スペイン人とインディオの混血が大半を占める。原住民のインディオにはミスキート族・ラマ族・スモ族があり、大西洋側に居住している。人口は、政府推定で約340万人で、半分以上が19歳以下を占め、人口増加率は3・53%である。



コリントの海岸。レオン市の北西にあるニカラグア最大の貿易港

## ニカラグアの歴史

1502年、コロンブスの第4回航海時に発見された。「ニカラグア」という国名は、その当時にニカラグア湖とマナグア湖の2大湖周辺地域を支配していた先住民インディオの長「ニカラオ」の名に由来するといわれる。16世紀はじめに、スペイン人の植民がはじまり、エルナンデス・コルドバにより、グラナダ（保守派の意）およびレオン（リベラル派の意）の2大都市が建設された。17世紀半ば、大西洋沿岸域は英・蘭・仏などの海賊にしばしば荒らされ、英国による植民も行われた。

18世紀初頭、レオン、グラナダの両市で反乱が勃発する。これが契機となってニカラグアの独立運動が急速に発展。グアテマラ総督領を構成する諸州の独立宣言が行われると同時に、ニカラグアも独立した。その後、ほかの中米諸国とともにメキシコ帝国に編入されるが、メキシコ帝国の崩壊で中米連邦の一員となる。しかし、この連邦は

中央集権度がきわめて弱く、中米連邦の崩壊とともに完全に独立した。

独立後、レオンの自由主義者とグラナダの保守主義者との間で政治抗争が激化、反逆と陰謀がくり返された。19世紀後半は、グラナダの保守主義者による政権がつづいたあと、自由党のセラヤ（José Santos Zelaya）が20世紀初頭まで政権を担当した。この間、英勢力が一掃され、コスタ・リカやホンデュラスとの国境も画定された。

19世紀以降はアメリカの影響下にあったが、20世紀に入るとソモサ家がニカラグアの農業、牧畜、鉱業を手中に収め、その独裁は1979年までつづく。1960年代にサンディニスタ国民解放戦線（FSLN）を中心に、反ソモサ勢力が結集した。78年の反政府系新聞主筆チャモロの暗殺を契機として反ソモサ運動が民衆レベルに拡大し、革命政権が成立する。90年の選挙で誕生した現チャモロ政権が疲弊しきつたこの国の再建に働んでいるが、その前途は厳しい。